

先日、戦前の『東奥日報』を読んでいたところ、読者からの投書を紹介するコーナーに聖徳公園に関する興味深い記述を見つけました。

聖徳公園についてはこれまでも「あおもり歴史トリビア」で取り上げていますが、明治天皇が明治9年（1876）と明治14年の巡幸で利用した浜町棧橋を「聖蹟」として保存することを目的として整備された公園です。昭和5年（1930年）、市民からの寄附によって「景仰聖徳」の碑が建立され、翌年7月に「聖徳公園」として開園しました。当初の公園地は現在地より東側の海に面した場所にありましたが、戦後移転を繰り返し、平成8年（1996）に現在地へと移転しています。

さて、投書は「聖徳公園保勝」（昭和6年9月5日掲載）というタイトルで、公園の周囲で海水浴をした人々が、海から上がったあと「碑から出てくる水」で身体を洗う光景を目にして情けなく感じたという内容です。多くは小学生でしたが、中には中等学校の生徒や大人もいたそうです。真っ裸になって水着やふんどしを洗ったり、脱いだ着物を碑の上に置いたり、さらには碑に上って着替えをする人もおり、碑は水浸しになっていたといえます。

投書にある「碑」というのは「景仰聖徳」の碑のことです。私は碑から水が出ているところを見たことがないので、この投書を読んで大変驚きました。



「景仰聖徳」の碑

そこで、碑が建立された当時の新聞を読んでみると、碑の北面と南面には噴水設備としてブロンズ製の獅子頭を取り付けたという記述がありました（『東奥日報』昭和5年11月3日）。この獅子頭から水が出ていたのです。いつ頃まで水が出ていたのか不明ですが、浅利健蔵『碑は語るわれも生きるなり』（1993年）に「ライオンの口から水の出ている」懐かしい石碑と紹介されているので、読者の皆さんの中には水が出ていたことを覚えているかたがいらっしゃるかもしれませんね。



ブロンズ製の獅子頭

改めて碑を近くで見ると獅子頭の口のあたりには水が出ていたと思われる穴がありました。確かに身体を洗うことはできそうですが、そうした行為は市民からの寄附で建てられた碑に対して失礼と感じる人もいたでしょう。

また、聖徳公園付近の海岸は海水浴場として整備されていた訳ではありませんが、公園が整備される以前から海水浴ができる場所として市民に親しまれていたようです（『新青森市史』通史編第3巻）。

なお、現在「景仰聖徳」の碑は建立当時と同じ向きに設置されているそうです。いつかこの碑から建立当時のように水が出ているところを見たいものです。